

令和4年度 第1回 甲賀市総合教育会議（議事録）

1. 開催日時 令和4年8月10日（水）
開 会 13時30分
閉 会 15時00分
2. 開催場所 甲賀市役所4階 教育委員会室
3. 議 題 （1）コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の推進について
4. 出席委員 岩永市長、西村教育長、松山教育長職務代理者、野口委員、山脇委員、藤田委員
5. 事務局員 （1）総合政策部
総合政策部長、市長公室長、総合政策部次長（政策担当）、
政策推進課長、係長、主査
（2）教育委員会事務局
教育部長、教育委員会事務局次長（総務・管理担当）、
同次長（学校教育担当）、同次長（社会教育担当）、教育総務課長、
学校教育課長補佐、社会教育スポーツ課参事（社会教育担当）
6. 傍 聴 者 0名
7. 議事内容 別紙参照

≪別紙：議事内容≫

○事務局

ただいまから、令和4年度第1回甲賀市総合教育会議を開会する。本日の総合教育会議は、「甲賀市総合教育会議設置要綱」第7条に基づき公開とする。ご異議ないか。

本日、傍聴については、3名の席を設けている。それでは、まず始めに、甲賀市市民憲章を唱和するので、皆様、ご起立をお願いする。

【全員起立し甲賀市市民憲章唱和】

○事務局

それでは、開会に当たり、本会議の議長でもある甲賀市長 岩永裕貴がご挨拶を申し上げます。

○岩永市長

委員の皆様には、本日は、ご多用にも関わりませず令和4年度第1回甲賀市総合教育会議にご参集いただいたことに感謝を申し上げます。また、日頃から、教育分野に限らず、多岐にわたる視点から本市行政の推進にご理解、ご協力をいただいていることについて重ねてお礼申し上げます。

さて、大変暑い日が続いている。東北地方を中心には大雨で被害が報告されている。心からお見舞いを申し上げます。この暑さの中で、消防の報告によると熱中症の救急搬送が昨年度の同時期に比べて倍増している。加えて、新型コロナの第7波ということで、連日、多数の新規陽性者が県内でも確認をされているが、やはり市民の皆様方の健康・命、安心安全を守るために行政として、最後の砦となる医療体制の確保について全市をあげて全力で注力いたしているところである。

甲賀保健所によるとちょうど昨日くらいが新規陽性者のピークアウトを迎えたのではないかとされているが、これからお盆の時期を迎え、人の交流が活発になることが予想される。これまで以上に、一層緊張感をもって感染拡大に取り組む必要がある。これまで以上の気配り、目配りが必要と気を引き締めて市政運営にあたっているところである。

こうした中、本市においても4回目のワクチン追加接種を進めている。西友さんにもご協力をいただき、枠の拡大、また予約がなくとも飛びこみでも接種をしていただける柔軟な対応を8月1日から始めているが、さっそく5回目のワクチン接種について国から通達が来ている。時期については10月頃になるかと思っているが、引き続き安心安全の市政運営に努めなければならないと考えている。

また、感染症の影響が長期化する中で、食費等の物価高騰等に直面しており、子育て世帯の生活を支援するため、経済団体はもちろんのこと、子育て世帯の生活について多くの課題が出てきている。そうした中で子育て世帯への臨時特別給付金として0歳から18歳のすべての児童に対して1人1万円の支給を8月から順次進めているところである。

さらに、原油価格・物価高騰の影響を受けている子育て世代の負担軽減のため、子育て世帯臨時特別給付金や学校などの給食材料費支援事業などを補正予算にて対応している。

そして、コロナ禍ではあるが、本市の学習支援教室に通う子ども達のうち、参加を希望する子ども達が集まり、宿題や課題に取り組むことで、学習に対しての意欲が一層高まることを期待し、夏休みの最終土日に宿題や課題に取り組む学習支援臨時教室を市役所別館において開催する。今回の臨時教室では、普段学習支援教室に通う子ども達が集まり、大学生ボランティアやスタッフと一緒に宿題や課題に取り組むことで、学習に対しての意欲が一層高まることを期待する。

教育分野ではスポーツ少年団の水口少年野球団の活躍が耳に届いており、嬉しい思いをしている。水口少年野球団、水口ジュニアソフトテニスクラブ、土山ソフトボールスポーツ少年団、水口剣道スポーツ少年団剣徳会、甲南剣道スポーツ少年団が全国大会に出場されることになり、7月20日に市役所において壮行会を開催した。

去年に引き続き新型コロナウイルスの影響で活動が制限された中でも、一生懸命練習に取り組んだ結果が、栄誉ある出場権へ結びついたものと思う。これまで努力されてきた成果を全国という大舞台で、思う存分発揮してほしいと思う。

去る6月5日には「第72回全国植樹祭」が本市で開催された。当日は、天皇皇后両陛下がオンラインにてご臨席になられ、お手植え・お手播きを披露されたほか、緑の少年団などの招待者による記念植樹や水口まつり保存振興会による水口囃子やKOUGA彩風（さいふう）舞人（まいと）によるよさこい、甲賀忍玉太鼓団による和太鼓、甲南中学校吹奏楽部による演奏など様々なパフォーマンス等も披露され、会場を甲賀市らしく大いに盛り上げていただいた。

当日の式典会場ではスタッフ等も合わせた参加者は2,118名、また、サテライト会場には2,500名にお越しいただいた。無事成功裏に収めることができたのは様々な方面でご協力いただいた方々のお陰である。改めて皆様に感謝申し上げる。

大会にあわせて、県内自治体で初となる「ウッドスタート宣言」を行った。この植樹祭を契機に、植樹祭のレガシーとして、将来の森林保全とカーボンニュートラルの実現を目指し、幼少期から木に触れることで将来の森林保全につなげる「木育」を推進していきたいと考えている。面積の約7割を森林が占めている恵まれた土地を活かして、この自然をみんなで守り育む機運を醸成していく所存である。

さて、本日の総合教育会議では、地域と学校が連携・協働した取り組みを進めていく「コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の推進」について、委員の皆様方と議論を深めていきたい。どうか忌憚のないご意見、活発なご議論をお願いします。

【事務局：議題1 コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の推進について 資料説明】

○岩永市長： この後に資料1の2ページ下段のテーマについて絞って意見交換したいが、まずは今報告いただいたことについてご意見いただければと思う。広くコミュニティ・スクールや土山・貴生川小学校で始まっている取り組みについて説明いただいた。この総合教育会議のなかではこのコミュニティ・スクールについて議題になるのは初めてなので、基本的なところも含めてご意見等いただければと思う。

○野口委員： 私たちはいろんな面でコミュニティ・スクールについては聞いているが、今日は市長を交えて、また教育委員会以外の総合政策部とも話ができるということで光栄に思っている。貴生川小学校のことは地元なので、今年の2月、広報に出ていて報告をご存じだろうが、子どもの活動は仕掛けないといいものがないなと思っている。直接関わってはいないが、いろんな方から報告を聞くと、報告の5番目、夕焼け教室などは夏休みや冬休み期間はあるけれども、土日ではなく普段の居場所・勉強場所がないかなと、ボランティアの方が集まってできたと言っている。

「新しい豊かさ」、ボランティア文化伝統、風土を大事に、ということが心に残るが、居場所づくり、おじいちゃんおばあちゃんがいるが、父母は仕事でいない、という家庭もある。寂しい思いをしている子どもたちとか。また様々ないろんなワークショップが行われているのもいいなと思う。フィンランドのヒンメリ(風鈴のように吊るすもの)、日野から専門家を呼んだり、市内でも革細工を作ったり、彦根でもカラムなどがあるが、貴生川の方も自発的にワークショップを作り、子どもたちが一生懸命取り組んでいる。そのような子どもだけでなく、大人も一緒に取り組む居場所があるというのがいいなと思っている。ほかのことはまた後程。

○藤田委員： ここにでている貴生川や土山、すごいなと言っている。私は信楽だが、子どもや若い人が少なくなったな、とマイナス思考な話題を集まるたびにしているが、少なくとも子どもと触れ合うことで大人も元気をもらえるし、地域の行事など地蔵盆など子どもだけのものではなく、地域で盛り上げていけたらいいなと思っている。ただ、学校への直接的な関わりはなかなかなく、待つ姿勢になってしまうが、互いが高めあうのが地域の自然、伝統が継承していくことが大事。細かなところは後程。私はいろんな場面で子どもと関わるが、純真・ストレート、何気ないことに大人がハッとすることがある。いろいろなところで地域の方々が子どもと触れ合っていたいただければ、よりよい住みよい町になっていくのでは。

○山脇委員： 私自身は甲南第二小学校周辺の在住だが、コロナでいろんなことがなくなっている。地域で盛り上げて行っていた行事が多かったが、コロナでどうしても中止されているものが多く寂しさを感じている。そんな中でも存続しているイベントもある。新田という地域があるが、新田地域を地域のみなさんと学童と一緒に地域内を歩くイベントがある。

○松山教育長職務代理者：

地域によってカラーが違う。課題も違う。貴生川と土山では行事もよさも違う。地域に合うカラーのコミュニティ・スクールを育てていくことが大事。また、地域や学校が負担にならないように。プラスのものが無いのに負担だけ多いのは本末転倒。教育委員会などで情報を開示したりしてよいものにしていければと思う。

○事務局： **【資料12ページ2.の説明】**

地域学校協働活動は、子どもにも大人にもよい効果があり、好循環になること。委員の皆様が思ってもらえることが見識だと思うが、ご自身のご経験やお知り合いの体験

から改善点や意見など、過去の取り組みや新たなマッチングなど、さきほどの議論の延長になるが、アイデアなどお寄せいただければありがたい。

○野口委員： 社会教育スポーツ課、総合政策部、教育委員会、自治振興会、地域マネージャー、社会教育マネージャーなどの意見も聞き、自分の中ですっきりしたい。市長のご意見も伺いたい。信楽中学生カンパニー、信楽中学校、フジキギャラリーというのがあり、地域と学生が作った商品が販売されている。発想豊かな狸の形をした傘など、インターネットで販売されている。大人の仕掛けにもよるが、芽生えはすごい。ホットなのは水口でも芽生えが今日見つかった。引きこもりを何とかしたい。手毬など文化を子どもたちに地域の人たちが伝えようと。そういう発想、声があるというのが素晴らしい。まちづくり基本条例や市長のマニフェストを見せていただいているが、人口が少なくなった中でも子どもは宝である、子育て教育はナンバーワンを実現しようと言ってくださっている。

また、多様性を大事にして、障がいがあっても、家族問題で困難があっても、何とかして解決しながら夢を実現させてあげたいというマニフェストはコミュニティ・スクールや協働活動を形作っている。どんな切実なことが地域で起きているか情報を出して、そしてそれをコミュニティ・スクールでやるのか、コミュニティ・スクールが先でなくても、地域学校協働の芽があればそこからでもいいし。そこでどういう人が関わっているのか整理しながら。そこで市長にお聞きしたいのは、新しい心の豊かさなどそういう面でコミュニティ・スクール、地域活動をどう考えてらっしゃるのか。マニフェストはしっかり読んだ。

○岩永市長： まず大前提として、子どもの生きる力の受け皿が世の中変わってきている。これまでは偏差値・学歴を持って社会に出るのか、ということが重要視されていた。地域も学校も子どもたちに求め続けていた。その中で人口減少。遅しさ、受け皿が様変わりしている状況の中で、コミュニティ・スクールは非常に大きな役割を果たす責任ある仕組み・制度だと思っている。一見するといいことを書いているが、コミュニティ・スクールありきではなく、もっと根本的なところで住民理解、先生が理解をして進めていかないといけない。自治振興会推進制度を10年前に策定し、前に進めているが、本来の意味、意義を市民と協議していなかったのが自治振興会、区・自治会の区別がついていない市民が多い。浸透していない。本来の意義・意味を浸透させていかなければ、子どもたちにどんな活力・エネルギーを与えられるのか、詰めていかないと教育・先生もただ負担になるだけでそのしわ寄せが子どもに行ってしまうてはいけない。市長のマニフェストについても自分の居場所、価値を見出せるまちを作っていくことが重要。極力提供できる機会を増やすことが肝要。

○山脇委員： 今は偏差値より生きる力が大事。その通り、今一番大事なのは自分で決断できる力。迷ったときに自分で決めたことだから、と思える。自己肯定感も大事。意外に膳所高校の生徒のほうが自己肯定感が少ない。自分より優れた人が多いと感じている生徒が多い。いろんな人がいらっしゃる。いろんな意見を言ってもらえる。地域にこんないい人がいるのだ、と認識につながって。そういう活動が一番大事。昨日ラジオで「おやじの会」という父の集まりが小学校のPTAにあると紹介されていた。自分が得意なことをやる。

参加は強制ではない。地域で活動をサポートすると。まさに「おやじの会」＝地域協働本部の中の一つの輪かなと感じた。お父さんが会社で一生懸命やっても家庭では見えないが、地域で活躍することでお父さんの良いところが見えたりする。すると「お父さんってすごいな」「決断する力がすごいな」と肯定感が生まれる。それが大事かと。

○岩永市長： 偏差値も大事だが、それだけではない。人生、多様性の大切さを考えたとき、様々な生きる力の育み方ができる教育現場であってほしい。そのあたりについてご意見を伺いたい。

○松山代理者： 生きる力が大事ということはずっと言われているが、私は全部いると思っている。バランス。私は勉強もいると思っている。もちろん勉強だけではなく、いろんな力があるとは思うが。

話は変わるが、最近年配の方の話を聞くことがあったが、まちづくりや子どもの成長について信念を持っておられて、俯瞰的に考えておられることを感じた。私にはないものの見方をされている。コミュニティ・スクールの活動の中には校内の環境整備もあるが、最近は夏休み最後の清掃活動に参加してもらえる保護者の数が減ってきている。学校は今夏休みで草が生え放題。昔はボランティアとしてコミュニティ活動とかいわず、ボランティアといわずに「ちょっとやっといてあげよう」とか、学校が近い人でもないのに「ちょっとやってあげよう」「子どもが宝だから」という理由でやってきてくれた。そのような信念のある方は甲賀市中におられると思う。そのような方々の話を聞くことが良いコミュニティ・スクールを作る指針になるのではないかと思いながら、その方の話を聞いていた。コミュニティ・スクールとか関係なく、大人ひとりひとりがどういう行動をすべきか、と考えるきっかけになるかもしれない。学校の草刈りをやってもらおう、とか。もちろん学校の先生は忙しいと思うが、一人ひとりが責任を持った行動をされること。先生も子どもたちとちょっとやる、地域の人もついでにちょっとやろう、という意識をもつこと。制度を作って、みんなが無責任になるのではなく、お父さんお母さんが草刈りをする姿勢を子どもに見せることも生きる力になるのではないか。

○岩永市長： 学校では生徒にいろんな指示をする。自発的に取り組むことを昨今は作ってもらっているが、やはり子どもたちにいろんな要求をして、子どもたちがそれに一生懸命に応えるという仕組みの中で先生方にも精一杯やっていただいている。その中に外部の目線を入れることで教職員の働き方の改革につながる、かつ自分で決める力にもつながる。また、どういう形で人生を切り拓いていくのかとことを伝えていくのがコミュニティ・スクールなどの本質とは考えている。ぜひ伺いたいのは教育現場（貴生川小・土山小）で関わっている人たちは本質の部分まで理解が及んでいるのか。制度として出来たからではなく、本質として理解が及んでいるのか、率直に今の段階を聞きたい。

○山脇議員： 県下と甲賀市のコミュニティ・スクールを比べると甲賀市は低い。いろんな場面で申し上げているが、改めて組織（コミュニティ・スクール）などをつくる必要もなく、甲賀市では地域との連携をしっかりと進めてもらっている。これができたから新たな負担が増えるのではなく、会議などは定期的に開かれたり、役職を決めたりなどは新しい仕事はあるが、負担感はほとんどなく、制度に後押しされて地域との連携が進んでいると

感じている。

○藤田委員： 小学校でいろいろな取り組みをされているところもある。先日、新しい保育園「このっす園」を視察させていただいた。スタッフの方々は三種類の土を混ぜて操作性など見ながらうまくされている。いろいろ夢を語りながら作っていただいていると感じた。あどけない子どもたちを見ていると「守ったらなあかん」と感じ、「防犯体制はどうですか」とか「あそこの草は危険ではないですか」とか言ってしまったが、水口小学校と行き来をされている。小学生と園児と過ごされている。そういうのからどんどん広まっていく。構えてするのではなく、自然にできていくことがいい。私は子どもが好きなので第二土曜日に子どもと遊んでいるが、サイクリングに行ったり、小川城址が近くにあるので、子どもに「徳川さんが通られたんよ」と話すなど、「信楽もこういうことがあったんだな」と何気なく情報を伝えられることがあれば郷土を愛してもらえるのでいい。ただ、今は仕掛けないとできないので、コロナで何もできないが、幸いお金がたまっていて、私の地域では花火を揚げている。短い花火ではあるが、「あ、もう夏も終わりやな」と言う子もいる。子どもが育つ中で季節感も地域の良さも感じてほしい。大人が仕掛けて刺激を与えてあげられることが大事。

「このっす園」の視察でスタッフの思い「ここでこういう風にしてあげたい」など聞けて大変うれしかった。

○岩永市長： コミュニティ・スクールのことはこれまでも取り組んでいる土壌がある。学校で授業をしたことがあったが、当時は言われたからやっていた。意義を深く考えずに講義していた。子どもたちに何を本質的にやってあげるのか、僕は理解していなかった。本質を理解することが大事。

○野口委員： 私はコミュニティ・スクールが不要だとは思っていないくて、どっちを見ても必要だと思っている。学校と地域が目標課題を共有して十分に協議して全員の理解と相互の協力が必要ということ、また仕組みを考えるうえでビジョンをどのように描くかということは、どの地域でもどの組織でも共通する。

神奈川県逗子市では、平成21年から本部を立てて地域だけで頑張ってきたとのこと。しかし地域だけではだめだということで、地域に学校の先生を呼び、講座をしてもらったとのこと。高齢化や学校側でも働き方改革などで人員の課題があるが、地域学校協働活動にさらに幅広いいろんな人たちを巻き込むために意見を聞いた。そして、「今度はやっぱりコミュニティ・スクールだ」という結論が10数年の結果、出た。一方的な活動はダメ。コミュニティ・スクールも地域学校協働活動も将来の子どもを育てることで一致した。

秋田県湯沢町がおっしゃっていたのは、学校も地域も共通しているのは「子どもは宝だ」と思っているということ。

大きな目標が子どもを育てる、ということ。私が聞いたのはほとんど地域の発案。社会教育委員がおっしゃっていたのは一体化、一元化、一緒にやること、双方向の意味がやっと最近分かっていて、ということ。ランドデザインは住民に浸透しているが、そういうように浸透してくれば、コミュニティ・スクールも進むのではないかな。

○岩永市長： 急がば回れじゃないが、その後の制度の意義に大きく関わってくる。目標課題の共有ができていないままに学校の先生校長の意見を聞く、ひいては支障が出てくる、そのあたりの根本的な目標の共有が必要。貴生川や土山小学校について意識の共有、議論をどのように深めたのか聞きたい。

○事務局： 甲賀市ではまだまだ準備段階、校長に向けての立ち上げまでの準備、立ち上げてからの課題、準備を進めて今日に至っている。校長が中心となって準備しているが、立ち上げた学校に聞くとまずは職員にコミュニティ・スクールとは何かということで足並みをそろえる、熱心な職員と地域の方のつながりがあるところは異動などによりなくなるが、ビジョンを共有すれば良さは継承される。

○事務局： コミュニティ・スクールの制度ありきで「こういう制度を作らないといけない」という学校からの働きかけで動くのではなく、今までの連携を今の形の中でうまく仕組みづくりに結び付けられないか、と社会教育委員からも提言されている。新たな体制を立ち上げるのではなく、今ある制度をうまく活用されている貴生川はいろんな地域の役員や、自治振興会の役員も活動に参加されている。コーディネータが自治振興会の部長になっていただいて、そういう人材によってうまく進んでいることを実感している。自治振興会制度は制度づくりからスタートして地域に説明がうまく伝わっていないまま10年が経っており、多くのご批判もいただいている。これから先の地域ビジョン、地域の担い手、社会資源が今までとは違う状況になっている中で、地域と行政が情報を共有しながら10年後、20年後を一緒に考えるグランドデザインづくりの提案をさせていただいている。「行政との距離感が遠くなった」という言葉もいただいている中、地域に入って一緒に考えようと思っている。その中で、コミュニティ・スクール、自治振興会が言葉だけではなく実質的に進むよう、教育委員会と総合政策部、また地域と学校が連携して進めていきたいと考えている。

○野口委員： 貴生川のまちづくりの中ではグランドデザインは評価されているので誤解がないように。自分たちで活動しようと思うと限界があるので、自治振興会の中にまちづくりや子育てなどに取り組む部会があるので、ボランティアの方に少しは払えるかなと思っている。それでも年間一人千円という交通費だが、貴生川小学校は学校連携協議会がそれぞれボランティアの組織で存在していて、夕焼け教室のメンバーがそこに入っている。関係ができて資金ができたという利点がある。今後、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体化については、学校教育課、社会教育スポーツ課、総合政策部等が部局横断的に協働して一体化のビジョンをもち、役割分担をしながら市民にも示して欲しい。

○岩永市長： 本部会議など組織づくりも庁内でしっかり議論していきたい。

○事務局： 「コミュニティ・スクールは学校がすべきこと」「地域学校協働活動は地域がすべきこと」という固定概念があったが、コミュニティ・スクールは協議する機関。地域学校協働活動は活動。以前から市から支援をいただいていたという話があったが、学校のニーズに応じた合議・話し合いが今までなかったのではないかな。分けていること自体がおか

しいことではないかと改めて感じた。「地域」というのは定義がしにくい。地域によって状況も違うし、リーダーも任期も違う。対等是对等だが働きかけは学校や行政からしていく必要がある。「地域をお願いします」では難しいのでは。

○岩永市長： 本質＝子どもたちの未来。制度立ち上げが本質ではない。市が目指す教育の本質にもなってくる「郷土を愛し担い手となる子供を育てるために～」という一文について最後に皆様からご意見をいただきたい。

○山脇議員： 地域の中の企業・NPOの代表が学校に入ってお話をしていただくのが大事。かっこいい人が地域にいることを子どもたちが認識することがいい。大学生、中学生や小学生がかっこいいお兄さん・お姉さんなど大学生や企業の力を入れればよい。

○藤田委員： 地域が大好き。大人が中心になって守っていくことが大事。朝、おはようという声かける活動をしているが、何気なく関わるのが大事。

○野口委員： ある程度思っていたことがクリアになった。コーディネータ等が「仕掛ける」ことが大事。住民の自主性に任せることでない。信楽中学生カンパニーでもホームページを発信しているが、商店街の方が後押しした。

○松山代理者： 地域に愛着を持つ人材を育てなければ私たちや職員が全員やっているか、資料を見ながらやっているが、地域に「地域に貢献できる人になってくれ」と求めるだけで会社を経営するとなれば、社長は「社員はどうやったら動くか」を考える。社長が動かなければ社員は動かない。自分たちが動かなければいけない。

○西村教育長： 本日の会議では、「学校と地域の連携・協働のあり方」について、「コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）と地域学校協働活動の推進」を議題として、様々な観点からご協議いただいた。学校教育には、子どもたち一人ひとりの持てる力を最大限に引き伸ばし、自立して社会で生き、豊かな人生を送ることができるよう、その基礎となる力を培う学びと成長の場としての役割が求められている。またそのことが、将来、地域コミュニティの担い手となる人材を育成することにも繋がることになる。

一方地域には、子どもたちが体験的・探究的に学習を行う上での、自然や歴史・伝統、さらには文化、産業など、教材と人材の資源が豊富にある。

子どもたちが、変化の激しい社会を生き抜き、高い志や意欲を持つ自立した人間として、他者と協働しながら課題を解決していくことに必要な生きる力は、学校だけで育むことができるものではなく、多様な人々と関わりや様々な経験を重ねていくことが重要であり、地域社会とのつながりの中で、豊かでたくましく育っていくものであると考える。

また、保護者の方々や地域の皆様が学校運営に積極的に参加していただくことによって、子どもたちの教育をよりよくしていこうという当事者意識が高まり、教育に対する責任を社会的に分担していく気持ちが生まれる。

地域の未来を担う子どもたちの成長は、その地域に住む人々の願いと希望であり、地域の皆様が主体的・自主的に子どもたちの学びに関わり支えていただくことによって、

愛着を感じてふるさとに根付く子どもたちを育て、地域振興につながることを期待される。さらに地域の皆様にとっても、学校や子どもに関わることが生きがいとじていただくことも少なくないのではないか。

このようなことから、学校と地域はお互いの役割を認識しつつ、子どもたちの学びや育ちのための両輪として、相互補完的に連携・協働していくことが、ひいては地域全体の教育力を強め、地域社会の維持発展・活性化の原動力につながると考えるところである。本会議のテーマであった「学校と地域の連携・協働」をはじめ、本市が抱える様々な教育課題についてこれからも、市長と教育委員会とが十分な意思疎通を図り、本市の教育行政の進むべき方向をしっかりと議論・共有することが重要であるとする。

本日は、熱心かつ慎重に協議をいただき、多くの意見を頂戴した。これからも引き続き、関係の皆様方のご指導・ご助言をお願い申し上げます。本日はありがとうございました。

(午後3時5分閉会)

以上